

星たちのカリオン

西村 優輝

月岡の田園に行く。日は落ちかけ、蒸し暑さが漂っている。工場の帰り、私は久しぶりに教会に寄ることにした。教会といっても、蔵を改装した小さなもの。さながら、キリストが生まれた馬小屋のようだ。教会は、年老いた木々に囲まれ、その周辺には田んぼが広がっている。神父の中山さんの屋敷以外、そばに民家はない。

夕日を背に受け、教会を目指す。こんもりとした林が見えた。かすかにピアノの音が聴こえる。私は駆け出した。門をくぐると、ちょうど中山さんが、教会の玄関に打ち水をしているところだった。

「お久しぶりです。中山さん」

「やあ、哲秀君。久しぶりですね」

「お体はいかがですか？」

「ああ、ありがとうございます。大丈夫ですよ。今日は早かったのですか？」

「はい。警報が多かったので、早上がりです」

「そうですか。良かったらあがっていきなさい。宏明君も来ている」

「お邪魔します」

教会に入る。六脚の長椅子、鈍く輝く十字架。そして、一台の古いピアノ。そのピアノを、宏明が弾いている。扉を閉める音に気付いて、宏明がこちらを向いた。

「テッチャン！」

「よ！」

「どうしたんだよ、最近」

「工場が忙しくてさ。ヒロんとは？」

「僕んとはそうでもない。いっつも早上がり」

「いいなあ」

「お陰で、たくさんピアノ弾けるんだ」

「今何やってるんだ？」

「ん？別に」

「なんだよ、教えるよ」

お茶を持って来た中山さんが教えてくれた。

「宏明君は今、曲を作っているんです」

宏明の耳が真っ赤になった。

「ああ！テツチャンには内緒だったのに！」

中山さんと私は笑った。宏明はまだむくれている。

「どんなのが出来たんだ？」

「まだ出来てないよ」

「途中で良いから。聴かせて！」

「じゃあ…少しだけ…」

宏明は小さくため息をついたが、次の瞬間、教会の隅々に音が充滿し、身体中の水分が振動した。しかしけっして乱暴ではない、一滴の雫のような音。ステンドグラスを抜けた西日が、彼とピアノを虹色に染めた。

「とりあえず、ここまでだけ…」

私と中山さんは、心からの拍手をした。宏明はまた耳を赤くした。

「まだ途中だし、気に入ってないところもあるんだ」

「それでもすごいよ！きつと良い曲ができるよ」

宏明は照れくさそうに笑った。

「僕、いろんな曲弾いてるうちに、どうしたらこんな曲が書けるのかわかって思ってた。誰かの心にのこる曲が書けたら素敵だなあ、なんてね。結局、自分が楽しくてやってるだけなんだけど…」

中山さんが、お茶を飲みながら言った。

「宏明君がそう思っているのなら、素敵な曲が作れますよ。技術が簡単、難しいではなく、宏明君の心のたくさんつまった曲が」

そう言つて、中山さんは微笑んだ。

お茶を飲み終え、教会を出ると、蒼と赤の交わる空に一番星が輝いていた。分かれ道まで、

私と宏明は語り合った。

「また来いよ、僕夕方はたいてい教会にいるから」

「ああ、そしたら曲聴かせてくれよ」

「そんなすぐ出来るものじゃないよ」

「いつでもいいさ。気長に待ってるよ」

蛙の声。一番星は、煌々きらきらと燃えていた。

* * *

宏明と知り合ったのは、小学校の時だった。宏明は私と違い、活発で明るい少年だったが、歌の授業が好きだったこともあって意気投合し、一緒に遊ぶようになった。

ある日、宏明がピアノを習うようになった。宏明に誘われ私も習うことにしたが、それが中山さんとの出会いだった。初めは、キリスト教の神父だと聞いて驚いたが、素朴でゆつたりとした人柄に、私たちは引き込まれていった。心臓が弱いらしく、無理は出来ない身体だったが、いつも私たちを熱心に指導してくれた。

私も宏明も、キリスト教の信者ではなかったが、そんなことは関係なかった。中山さんの音楽が好きだった。三人で音楽を通して心を通わせること、それが幸せだった。

しかし、戦争が激しさを増すにつれて、私たちは工場に借り出されることが多くなった。

それでも時間があれば、三人で音楽に触れた。義務ではなく、身体にしみた習慣のように。それは突然だった。数日後、また教会に寄った。久しぶりのレッスン。指が動かず、宏明に笑われた。今まで、幾度と繰り返された光景だった。レッスン後、談笑していた時だった。

「そーいやヒロ、曲は出来たのか？」

「まだまだ」

「ああ、早く聴きたいなあ」

その時、中山さんが微笑んで言った。

「大丈夫。時間がかかっても、生きていれば、その時までの君を、曲にすることが出来ます」
私たちは黙った。中山さんは遠くを見つめた。

「…私は…死ななくてはなりません」

「え…」

「…召集令状が来たのです」

「そんな！中山さんは、心臓が…どうして」

「これで良いのです。これで私の分の飯が子供たちに与えられ、少しでも早く工場から開放されるよう手助けが出来るのなら」

「僕たちが良くありません！」

「俺たち、まだ教わるのがたくさんあります！」

「中山さん！もつと音楽を教えてください！」

「中山さん！」

もう声にならなかった。少年二人が、わんわんと声をあげて泣いた。中山さんは私たちを抱きしめた。

「…君たちに教えることは、もうありませんよ。君たちは音楽を愛している。それで十分なのです。ただ、約束してください」

中山さんの目が、光った。

「生き続けなさい。老いて死ぬまで」

教会に、光が満ちた。

「生きて、またいつかこのピアノで、君たちの音楽を…」

中山さんは、もう一度私たちを抱きしめた。西日が、私たちを虹色に染めた。

* * *

教会は二人だけになった。私は作業が長引くことが多く、宏明が一人ピアノを弾いていることも多かった。そのうち、宏明の通う工場も忙しくなり始めた。残暑が和らぎ、涼しい夜が続くようになった。

赤とんぼの飛び交う田園を、私は駆けた。向こうから駆けてくる人影は、宏明であった。

二人はそのまま、教会まで駆けた。息が切れるのにも構わず、ピアノに向かう。久しぶりの連弾。二人の泥だらけの指が、鍵盤を汚した。ステンドグラスが輝きを失うまで、ずっと弾き続けた。

教会を出ると、鈴虫の声が響いていた。

「…中山さん、元気かな」

「…大丈夫。きつと…」

「…テツチャン」

「ん？」

「裏山行かない？」

「いいけど…あんまり遅くなるとヒ口怒られるんじゃないか？」

「平気だよ」

田園の向こうにある小高い丘。私たちはそこを、裏山と呼んでいる。私たちの、大切な隠れ家だ。頂上にある一番高い木に登り、私たちは空を見上げた。

漆黒に浮かぶ、阿賀北の星たち。その勇壮で、慈愛に満ちた静寂さは、きつと人間が一生かかっても手に入れられないものに思われた。

「…きれいだね…」

「…うん…」

「…テツチャン…」

「ん？」

「僕…この星空みたいな曲を作る」

宏明の目に、光が映る。

「あんなにたくさんさんの星たちが、黒いキャンバスに散りばめられている。でも何一つとして余分な星なんかかない。眩い星も、闇に呑まれた星も、無駄なものなんてなくて、静かだ」

私たちは、光に包まれた。

「いつになるか分からない。一生出来ないかもしれない。でもやってみたい。あんな曲を書いてみたい」

宏明は私を見つめた。

「もし曲が出来たら、一番にテツチャンに弾いて欲しい。僕たちの…中山さんのピアノで弾いて欲しい」

「…わかった」

「…いいの？」

「もちろんだ、ヒロ」

「…ありがとう」

あの時の青白く輝くヒロの顔、今でも忘れることはない。

* * *

寒さが身にしみる頃だった。私の父の楽器店が潰れた。潰されたというべきか、時世にそぐわないという達しが重なった結果だった。私たち一家は、父方の親類を頼って、東京に移り住むことになった。私はわずかな合間をぬって、教会に走った。宏明には別れを言いたかった。

宏明は絶句した。だが、すぐに気を取り戻すと、いつ発つのだと聞いた。明後日の昼だと答えると、宏明は口の中で私の言葉を繰り返した後、わかったと言った。私たちは泣かなかった。

故郷を発つ日は、慌しくやってきた。月岡駅は静かだった。木枯らしが吹き抜ける。私たち一家は疲れ果て、考える余裕はなかった。汽車が轟音ごうおんとともにやって来た。その時だった。

「テッチャン！」

振り向くとそこには、肩で息をし、膝を擦りむいた宏明が立っていた。

「テッチャン…これ」

宏明は、胸に抱いたノートを私に差し出した。

「本当は、もっと年をとってから書きたかったけど…」

私はノートを開いた。

「今の僕の、精一杯の曲だよ」

宏明の曲。

「…ヒロ…ありがとう」

父の呼ぶ声がした。もう行かなくては。咽ぶむせような汽笛を合図に、汽車は動き始めた。

「聴かせてね！あのピアノで、また三人で！」

小さくなる宏明に、私は窓から身を乗り出し、手を振っていた。頬の冷たさは、風のせいだけではなかった。

汽車は田園に行く。またいつか、虹色に染まった西日に照らされることを想い、私はノートを抱いた。鐘の音が、遠く響いている。